

Heather L. Williams,

*Social Movements and Economic Transition: Markets and Distributive Conflict in Mexico.*

Cambridge: Cambridge University Press,  
2001, xiii + 239pp.

ほしの なえこ  
星野 妙子

I

20世紀最後の20年間にメキシコでは政治経済体制の抜本的な転換が進行した。国家介入型経済とPRI（制度的革命党）一党支配政治が対をなす従来の体制は、1982年の対外債務危機を契機に経済的に行き詰まり、その後の経済改革によって一党支配の経済的基盤が掘り崩されたことで、政治的にも行き詰まった。代わって形を整えつつあるのは市場主導型経済と多党制政治が対をなす新たな体制であり、それへの転換過程は2001年のPAN（国民行動党）フォックス（Fox）政権誕生で一区切りがついたと言える。

このような歴史的意義を持つ重要な時期であることから、1980年代、90年代のメキシコの政治、経済、社会を分析した研究の成果が近年次々と出版されている。なかでもひとつの重要な流れをなすのは、政治経済学のアプローチからなされた研究である。代表的なものを挙げれば、金融の国際化を背景とする、政権内で台頭したテクノクラートと民間金融部門との同盟（alliance）の形成を分析したマクスフィールドの研究 [Maxfield 1990]、PRIが主導するコーポラティズム体制からの労働セクターの排除という視点から公企業民営化政策を分析したテイクマンの研究 [Teichman 1995]、NAFTA交渉をめぐる政権内のテクノクラートと民間大資本の連携（coa-

lition）を分析したサッカーの研究 [Thacker 2000] などがある。本書も、そのような政治経済学のアプローチからなされた研究の流れのなかに位置付けられる。上の3つの研究は、経済の変化と、政権内エリートと諸社会階級の同盟関係の再編を関連付けて論じているという点で共通点を持つ。経済の変化と社会階級の動きとを関連付ける点では本書も同様であるが、分析対象が、社会階級自体ではなく、さまざまな社会階級が担う社会運動であることが3つの研究と異なる点である。

著者H・ウィリアムズはメキシコの社会運動を専門に研究してきた若手の政治学者であり、本書でも事例で取り上げている、金融機関に債務を負う人々の運動であるバルソン（Barzón）運動について、すでにいくつか論考を発表している。本書は、それらを含むこれまでの研究成果を基に編まれた最初の本格的な著作と位置付けられよう。

II

1980年代、90年代にメキシコでは社会運動が活発化した。国際的にも有名になった運動としては、南部チアパス州の原住民系農民の武装蜂起であるサパティスタ民族解放軍の運動がある。本書は、さまざまな運動のなかからタイプの異なる2つの社会運動を取り上げ、経済の抜本的な変化によって社会運動の担い手や戦術にどのような変化が起きているのかを、特に運動が持つ資源分配機能に注目しながら明らかにしている。メキシコでは従来政権与党であるPRIが、選挙の際に票を集める集票機能と、その見返りに住宅、補助金、公共サービス、労働条件などの公的資源を分配する資源分配機能の2つを併せ持つ政治マシンの役割を果たしてきた。しかし経済改革による公的資源の縮小によって分配機能が低下し、その影響で集票機能も低下したことから、政治マシンは機能不全に陥った。社会運動の活発化はそのような政治の流動化を背景にしている。

本書の方法論的な特徴は、2つの事例の分析から帰納的に1980年代、90年代のメキシコ社会運動に共通する特徴を導き出そうとしている点にある。著

者が事例にこだわるのは次の2つの理由からである。第1に経済の変化と社会運動の運動関係は、一国レベルのマクロ分析では明らかにならないという点である。すなわち、社会運動の発生には経済の変化の特定要素がかかわり、変化の影響も社会成員間で異なる。そのために発生のある地域社会の文脈のなかで運動を分析しなければ、経済との関連、運動を担う諸社会集団の同盟関係の変化も明らかにならないという理由である。第2に、地域で発生した運動のなかで特定のものが全国的な運動へ発展する理由は、事例分析でなくては明らかにならないという点である。全国展開のためには運動のタイミングと持続力が重要であり、それは個々の運動を分析することによってしか明らかにしないと著者は述べる。

本書で事例として選ばれたのは、民営化されたシカルツァ製鉄所の企業城下町ラサロ・カルデナスで展開した運動と、中部内陸部のサカテカス州の農民が始めたバルソン運動である。これら2つが選択されたのは、その類似点と相違点によると考えられる。類似点としては、第1に運動の発生ないしは変質の契機と、経済改革の関連が明らかである（ラサロ・カルデナスの場合は民営化政策、サカテカスの場合は農業保護切下げ政策）、第2に旧体制で優遇された人々の運動である（前者は公企業労働者、後者は自営農民）、第3に人的ネットワーク、コミュニティの支持、正当化の言辞など運動の道具立てが共通である、などが挙げられる。これらの類似する特徴は、2つの事例が、経済の変化と、政治の流動化ならびに運動の発生との関連を分析するのに好都合であることを示すとともに、この時期の他の運動にも共通する可能性が高いことを示唆する。一方、相違点は、前者が地域にとどまり民営化を契機に労働運動から住民運動へ変質したのに対し、後者は1994年の政治・経済の動揺期に債務者の運動として全国展開を遂げたことにある。異なった展開を遂げた2つの事例を対比させて検討することで、運動のダイナミズムを規定する要因についてより深い考察が可能になろう。

### III

本書の構成は次のとおりである。

#### 序章

#### 第1部

第1章 メキシコにおける市場、マシーン政治、そして抗議運動

第2章 反乱者の道具箱

#### 第2部

第3章 鉄の町の民営化と抗議運動

第4章 ラサロ・カルデナスにおけるシフトする市場とシフトする要求

第5章 サカテカスにおけるバルソン農民運動の起源

第6章 バルソン運動——農民の反乱から債務者の反乱へ——

結 論 運動と市場の相互作用

以下に各章の概要と重要と思われる論点を紹介したい。

序章では、社会運動に関する既存の研究との比較の見地から本書の方法論的特徴が述べられ、本書の課題と2つの事例を選んだ理由が示される。方法論的特徴は事例分析であることであり、課題と2つの事例を選んだ理由はIIで述べたとおりである。

第1部では、第2部の事例研究での考察を一部先取りするかたちで、メキシコの1980年代、90年代の社会運動の全般の特徴が述べられる。第1章では、経済改革が公的資源の分配構造と分配をめぐる争いをどう変化させたかについて、その概略と変化のロジックが示される。表題にあるマシーン政治とは、前述のような集票と公的資源分配のマシーンとしてのPRIの機能に依拠した政治をさす。そこでの資源分配は、投票との交換、とりまとめ役のプローカーの介在、資源の受け皿としての地域の存在などを特徴とする。経済改革による分配可能な資源の縮小は、プローカーの離反や集票機能の低下を招くと同時に、資源分配を要求する運動を活性化させた。運動の特徴として著者は、第1に運動の場の変化、第

2 にリーダー間の同盟関係の変化, 第3 に市場機能を尊重せざるをえないという限界, の3つを挙げる。第2章では長続きする運動に特徴的な4つの道具立てが紹介される。政府による弾圧やリーダーの懐柔を阻み, 運動を長期間維持するための資源確保を可能にする戦略として, 第1 に運動に共感する個人や同じ要求を掲げる集団からの連帯的支援, 第2 に聴衆の怒りや同情の喚起, 特にマスメディアを味方につけること, 第3 に政党とのつかず離れずの関係, 第4 に民主的な決定手続き, の4つが挙げられ解説される。

第2部では, 第1部の考察を実証的に裏付けるために, 2つの事例が各2章を割いて分析される。第3章では, 1990年代初頭の製鉄所民営化までの, 労働組合を主体としたラサロ・カルデナスでの運動が叙述される。製鉄所が未開地に建設されたために, 政府の統制から労働組合が比較的自由であったこと, 政府の目玉プロジェクトであったために分配の成果も豊富にあったこと, 労働組合が町の居住条件改善の要求をも肩代わりしたことなどが指摘される。しかし製鉄所の民営化により資源分配チャンネルが解体され, それに呼応して運動も工場から地域へ場所を移し, 生活に根ざした個別の要求を掲げ自治体と交渉する住民運動に変化する。第4章では民営化前後の運動の特徴が比較検討される。民営化前の運動の戦略として, 労組のネットワークを通じ資金的, 物的, 人的支援が確保されたこと, 労組内で民主的決定手続きが尊重されていたこと, が指摘される。民営化後の運動へ継承されたのはリーダーと戦略であった。民営化で解雇された労組リーダーは住民運動のリーダーに転身した。新たな要求軸として環境問題が登場したが, それには問題自体のアピール性に加え, 労働運動で培った重工業の健康被害についての知識も影響した。戦略面での変化は, 労組に代わり NGO や同様の要求を掲げる運動との連帯が重要となった点である。運動の限界として, 力量不足, 交渉チャンネルの錯綜などの理由から, 長期的解決ではなく, 1回限りの特例の金銭支払いで決着する傾向にあることが指摘される。

第5章では全国展開前のサカテカスのバルソン運

動が分析される。運動は1993年, 数人の重債務農民により金融業者や行政府に債務の繰り延べや軽減を要求する運動として始まり, 参加者を増やし, 隣のハリスコ州で展開中の同様の運動から名を借りてバルソン運動と名をのようになる。ちなみに, バルソンとは「くびき」を意味するスペイン語である。運動の背景として, 農業保護切下げ政策により農民の債務が累積したこと, 農民には家産の不可侵の意識が強く, 債権者による差押えに強く反発したこと, が指摘される。当局の対応は曖昧で, 当初運動は盛り上がり欠いていた。しかし, サパティスタの武装蜂起を契機に世間の関心が集まり出したこと, 抗議理由を農民の債務以外に広げ, 農民以外の参加者を得たこと, などから, 運動は1994年に入り勢い付く。同年12月には通貨危機が発生し, 借金を抱える都市中下層民も参加者に取り込んで運動は全国に拡大した。第6章では全国的な債務者の抗議運動に発展したバルソン運動の戦略を分析している。運動の発展に寄与した戦略として, 政府の腐敗など, 債務以外の問題に抗議対象を広げ市民・マスメディアの共感を得たこと, 債務者への支援の見返りに運動への参加を求め参加者を増やしたこと, 資産差押えへの抵抗, 法律相談, 集団提訴など多様な闘争手段を用いたこと, 政党とは時宜に応じて柔軟な関係を保ったこと, 民主的決定過程や地域の自律性を重視したこと, などが指摘される。運動は2年ほどの隆盛の後, 1997年以降勢いを失った。債務の軽減に成功した参加者が運動から離れたこと, 有力な闘争手段であった集団提訴が司法当局から斥けられたこと, リーダーが立法院での金融改革に戦略を転換したこと, などが理由として述べられる。リーダーの国会転出後, ラサロ・カルデナスの場合のように運動は1回限りの特例の金銭支払いをもって収束するようになった。

終章では, 運動の発生と発展に関する2つの事例研究に基づく結論として, 第1に, 運動が発生するのは, 市場の変化により人々の生活が悪化し資源分配の要求が生まれるだけでは不十分で, 悪化のプロセスと責任者が関連付けて人々に認識されることが必要であったこと, 第2に, 運動の発展には資源調

達や当局による懐柔の阻止や弾圧の回避が重要であり、そのためには資源動員チャンネルの開拓、マスメディアや政党との協力、民主的決定過程が有効な戦略となったこと、これら2点が示される。

#### IV

以下においては本書に対する評価として次の2つの点について述べてみたい。第1点は著者の研究対象との距離の取り方にかかわるもので、評者が積極的に評価する点である。第2点は事例分析の有効性と限界にかかわるものである。

1980年代、90年代にメキシコにおいて進展した新自由主義経済改革のひとつの帰結は両極化の進行であった。経済改革によって、新たな経済機会を巧みにとらえて上昇を果たした人々が存在する一方で、それを大きくしのぐ数の人々が、本書が描くように、失業や債務の累積などによって苦境に追い込まれた。本書の叙述からは、著者のそのような人々への同情と彼らが担う運動への共感が読みとれる。しかしながら、研究対象に共感を懐きながらも、それを分析する社会学者としての著者の目は冷徹である。評者の理解では、著者の問題関心は、資源分配を要求する運動が従来のチャンネルの代替役を果たし得るのか、あるいは、政府に対し資源分配の長期的な改善を要求していく能力を持つのか、いわば、運動の可能性と限界を探りたいという点にあったと考えられる。本書が描き出した運動の可能性とは、市場主導型経済の正当性に疑問を投げかけることができる運動の能力であった。しかし同時に本書が明らかにしたのは、資源分配の長期的な改善を要求していく能力を持たない、現行の運動の姿であった。それは、市場主導型経済に疑問を投げかけながらも、政府の弾圧を回避するため、聴衆の共感を得るため、あるいは、僅少な分配資源をこれ以上減らさないために、市場の機能を尊重せざるをえない運動の限界と理解できる。さらに、1回限りの特例措置で矛を収める最近の運動の傾向は、実態面からもそのような限界を裏付けるものであった。

このような結論から導き出せる社会運動の展望な

らびに市場主導型経済の展望は極めて暗い。すなわち、社会運動は市場に対し正当性についての疑義をつきつけることはできても長期的分配改善を働きかける能力を持たず、一方、市場の側は運動からその正当性を疑われるという不安を常に抱えることになる。このような悲観的な見方は、市場の機能と分配をどう折り合わせるかについて有効な解答を見出せていない、評者を含む多くの研究者が共有するものでもある。しかし社会運動に共感を持つ著者の結論であるだけに、それは一層の説得力を持つ。

第2の点は事例研究の有効性と限界についてである。著者は、経済とのかかわりで社会運動を分析する場合、運動を地域社会の文脈に置き、戦略的特徴まで含めて分析しなければ、運動の発生と発展の要因は明らかにならないとの理由から、事例研究の必要性を強調する。その主張は、本書の2つの事例分析において十分に裏付けられたと言えよう。ただしあえて難点を挙げれば、2つの事例に依拠して社会運動一般を論じることの限界が、必ずしも明示的に示されていないことである。たとえば、2つの事例は、ともに旧体制で優遇されてきたが、政治マシンの機能不全で分配のチャンネルを失った人々の運動である。サパティスタ民族解放軍の運動のような、旧体制で不遇を困った人々の運動ではない。評者は、事例部分(第3章から第6章)と比較して、事例からの一般化を試みた結論部分(終章)が分量的に短すぎ、内容的にも論旨が不明瞭との感想を持った。分量的な短さは2つの事例から社会運動一般に通じる結論を導き出すことの限界を、論旨の不明瞭さは著者自身が2つの事例と社会運動全体との関連を論理的に整理しきっていないことを反映しているのではないだろうか。関連を整理する際に、仮に議論を2段構えにし、2つの事例から旧体制で優遇された人々の運動一般に通じる結論を導き出し、それからさらに社会運動一般に通じる結論を導き出せば、2つの事例の意義と社会運動全体における位置が少しは明瞭になったかもしれない。

いずれにしても、上に挙げた難点は重大なものではなく、著者による今後のさらなる事例研究の蓄積の過程において改善されるものと思われる。本書は、

冒頭に述べた政治経済学のアプローチによるメキシコ研究の流れのなかで、重要文献として堅固な位置を確保すると予想される。

文献リスト

- Maxfield, Sylvia. 1990. *Governing Capital: International Finance and Mexican Politics*. New York: Cornell University Press.
- Teichman, Judith A. 1995. *Privatization and Political Change in Mexico*. Pittsburgh: University of Pittsburgh Press.
- Thacker, Strom C. 2000. *Big Business, the State, and Free Trade: Constructing Coalitions in Mexico*. Cambridge: Cambridge University Press.

(アジア経済研究所地域研究第2部主任研究員)